

# 初めての海外生活の地ミャンマーの教育環境

芳賀啓介

(会社経営者)

## ミャンマーでの幼稚園選び

妻と当時4歳と2歳だった息子たちを日本に残し、訪れたこともない国だったミャンマーに降り立ったのは8年前のことです。「よし、この国で生きていこう」という覚悟が固まってから家族を呼び寄せ、その後2人の子宝に恵まれ、今では12〜3歳の4人の子どもたちに囲まれ、事業のほうも、コロナ禍の厳しい状況ではありませんが、すぐに倒産する心配はない程度ですが、なんとか展開することができています。

結果的に子育て環境としても、苦勞もメリツトもいろいろと感じながら、ミャンマーで楽しく過ごさせていただいていますので、その一端をご紹介しますことができます。

通常海外で我々日本人の家族が子どもの学校を選ぶ際に選択肢となるのは現地校、インターナショナルスクール、現地の日本人学校の三つです。しかしここミャンマーでは、現地校に外国人が入学することはできません。したがって、二択になるのですが、長く海外に滞在する覚悟をもってきたので、インターナショナルスクールにお世話になろうと考えました。

私たち家族が来た2013年頃(当時5歳と2歳の息子2人)は、ミャンマーの民主化が始まって間もない頃で外国人がとても少なかった

芳賀啓介 (はが けいすけ)

1979年神奈川県相模原市生まれ。しがない日本のサラリーマンから一決意してミャンマーに移住。グループ会社含め3社を経営。趣味は、野球とTシャツ作り。

ということもあり、学校の選択肢も非常に少ない状況でした。でもだからこそ、多様な人種のお友達が集まるインターナショナル幼稚園にお世話になることができました。

当時、日本から移住してきたばかりで、すべてのことが新鮮で、英語の環境に子どもたちが慣れてくれるのか、そもそも英語を理解できるようになるのか、大きな不安を抱えながら入学でしたが、すぐに慣れてくれて、私たち親も驚くようなきれいな発音で英単語をすぐに覚えていく子どもたちに目を丸くしました。

民主化が進んだ最近では、さまざまな国から学校法人の進出があり、選択肢は増えたものの、欧米人はこのあたり、アジア系はこのあたり、ローカルはこのあたり、と、カテゴライズが進んでしまい、お財布事情によっては、本当に多様な環境に入れることが以前よりも難しくなってきたように思います。欧米人（つまりネイティブイングリッシュスピーカー）が多く通うグロバルブランドの学校法人は、幼稚園でも年間の

学費が100万円近くになり（そのまま持ち上がって小学生になると200万円、高校生になると300万円超）、会社や政府の補助がない私のような事業者にとってはハードルが高いです。

私たちが保育期において重視しているポイントはカリキュラムや設備等の環境もありますが、何より「多様性」。その点では、ここ数年で劣化してしまっているのかもしれない。

学校以外のところでは、家庭内でメイドさんに家事や育児の一端を担ってもらえる点は大変助かっています。妻も仕事を手伝ってくれていて、親類が近くにいるわけでもないので、手が多いのは助かりますし、5歳と3歳の娘は、親兄弟や日本人の友達とは日本語、幼稚園では英語、メイドさんとはミャンマー語、と、トリリンガルへの道を進んでくれています。

### 何語を子どもたちの第一言語とするのか

保育事情からは少し飛躍しますが、長男（現在12歳）と次男（現在10歳）は、彼らがそれぞれ

れ5年生、4年生の2学期に、インターナショナルスクールから日本人学校に転校しました。

海外子育てでよく話題になるのが、日本語も

英語も両方できるが、両方が中途半端になって

しまう、ということ。わが家でもいろいろな葛

藤がありました。が、前述の学費の問題に絡むと

ころもあって、ネイティブスピーカー中心では

ない環境での英語教育に限界を感じたのです。

彼らがインターナショナルスクールに通って

いる頃、よくよく聞くと、友人同士の会話で使

っている単語がとてもシンプルな単語にとどま

ってしまっていることに気がつきました。会話と

しては必要十分なのですが、そういった単語レ

ベルでの会話をベースとしたときに、より深い

議論や思考ができるかという点、難しいのでは

ないかと考えたのです。さまざまな議論がある

と思いますが、思考力とボキャブラリーの豊富

さは、切っても切れないものではないかと考え

ています。子どもたちにとって、思考力の基と

なるボキャブラリーを育みやすい環境は何語な

のか。そういう観点で10歳前後以降の教育環境  
を選択し直す必要性を痛切に感じ、日本人学校  
へ転校することとなりました。

一方で、長女（5歳）と次女（3歳）は引き  
続きインターナショナル幼稚園です。海外に移  
住して8年たつ私も妻もいまだにネイティブス  
ピーカーの英語のヒアリングには苦労するので  
すが、その点で彼ら彼女たちは、さまざまな言  
語に触れているので、耳の聞き取りの可動域が  
広く、英語そのものへの抵抗感はなさそうです。

子どもたちには、世界を股にかける仕事をし  
てほしい。その際に言語のバリアーが限りなく  
低い状態で活躍してほしい。あらゆる言語の  
人々と友達になってほしい。私たちが少なから  
ず言語には苦労していますので、彼ら彼女たち  
には、言語の壁も文化の壁も感じずに、グロー  
バルに活躍してほしいと考えています。

### ミャンマー人の教育事情

私たちが外国人として享受できる教育環境と、

ミャンマーの方々の教育環境は大きく異なりま  
す。私たちが住んでいるヤンゴン（つまり都市  
部）では、半数以上の家庭が幼稚園に通わせら  
れているようですが、地方では、幼稚園に通わ  
せる家庭の割合は10%にも満たないそうです。  
また、小学校に上がると、90%以上の子どもた  
ちが学校には行っているのですが、そのうちの  
ほとんどが、学校での学習とは別に塾へ通って  
いるそうです（地方ではもっと低い割合です）。  
というのも、授業内容が不十分で、授業時間も  
日本の学校と比べると少なめであり、学校は行  
くだけ。勉強は塾でする、という驚くべき現状。  
また、幼少期からアートや音楽、体育等の情操  
教育科目がなく、これからJICAも含めた外  
国のODA支援を受けながら整備が進み始めた  
ところ、といった状況です。

国の根幹は教育だ、などとよく言いますが、  
治安も良く、倫理観も高く、素晴らしい人柄の  
方々が多い国なので、教育の改革が急務だと感  
じています。子どもをもつ親として、ミャンマ

ーでビジネスをさせていたただいている一人の日  
本人として、そういった現状を少しでも良い方  
向へ変えていけるよう、何か取り組んでいきたく  
いと思っています。

そのひとつとして、私自身もシンガポール人  
が運営するモンテッソーリスタイルのインター  
ナショナル幼稚園に、個人出資という形でお手  
伝いをしています。

ローカル向けへ教  
育理念等を伝える  
ことになかなか苦  
労はしていますが、  
ご興味のある方は  
ぜひご連絡いただ  
ければ幸いです。



<https://twitter.com/hagkeisk>

<https://www.facebook.com/hagabon>

\*この記事は2020年12月に書かれたものです。(編集部)